

日本におけるブラインドサッカーの普及に関する研究

Research on the popularization of Japanese Blind Football

1K05B040

指導教員

主査 間野義之先生

大場 明子

副査 倉石平先生

1、背景

現在日本国内には約 31 万人の視覚障害者が存在する。政府は障害者と健常者の「共生社会」の実現を目指し、「障害者基本計画」を制定している。渡邊(2006)は「障害者スポーツは共生社会構築へのメンタル面での効果が期待されている」としており、障害者スポーツによって障害者と健常者及び社会を結びつける効果が期待されている。

視覚障害者スポーツの中でもブラインドサッカーは新興スポーツである。2001 年に韓国から輸入され、関東と関西を中心に競技人口を増やしてきた。この競技はアイマスクをして競技を行うことから、全盲の視覚障害者以外にも弱視者や健常者も一緒に競技を行うことが出来る。また、監督・ゴールキーパー・コーラーは健常者が勤めるというルールのため、視覚障害者と健常者の「共生社会」を育む効果も期待できるだろう。

なお、以下に記述する「B1、B2、B3」とは、IBSA の規定する障害のカテゴリー分類である。B1 とは視力 0 もしくは光覚、B2 とは視力 0.03 以下もしくは視野 5 度以内もしくはその両方、B3 とは視力 0.1 以下もしくは視野 20 度以内もしくはその両方である。

2、研究目的

そこで本研究では、国内のブラインドサッカーの人口を増加させるため、JBFA の普及の方向性に関して、課題を明らかにすること、そして今後のブラインドサッカーの展望を示唆することを目的とする。

3、研究方法

国内の全 11 クラブに所属する 88 名の競技者に対し、基礎的属性と競技の魅力に関するアンケートを行った。同時に、抽出した代表的な 4 クラブの代表者に対し、クラブの概要と特徴的な活動の詳細についてアンケート調査を行った。

4、結果

国内のブラインドサッカー(B1 カテゴリー)の競技者は初期の普及講習会参加者を中心にクチコミで広がり、現在のように関東と関西を中心に全国に普及していった。

ブラインドサッカーの魅力については、B1、B2 以上、晴眼者でいくつかの異なる点が見られた。B1 は「ピッチの中を自由に走り回れる点」を挙げた回答者が最も多く、B2、B3 以上では「見えなくてもサッカーが出来る点」が最も多い結果になった。晴眼者では「サッカーの技術向上につながる点」を挙げた競技者が多かった。

各クラブへの調査では、地方都市のクラブは選手及びサポーター獲得に苦労しているが、大学生を獲得することで成功しているクラブがあった。また J クラブとの提携も普及に有効だった。

5、考察、まとめ

現競技者と 4 つのクラブに調査したところ、競技者の 9 割以上が過去に他のスポーツを経験しており、現在も 3 割の競技者が他競技を並行して行っている。さらに多競技クラブとして活動しているクラブもあり、一部のスポーツ愛好者が数種目を行っているのが現状である。

また、大学生がクラブの選手及びサポーターになった場合、学生は活動しやすい環境にあるが、一方で卒業を機にチームを離れる人もいるため、安定した部員確保のための計画的な普及活動が求められる。また、活動地域の大学のサッカー部と提携しているクラブでは、指導者を継続して確保できるなど利点も大きい。

さらにＪリーグクラブと提携を行っているクラブでは指導者確保に加え、普及イベントの企画やノウハウ等の提供を受けることが出来る。また、クラブを通じてＪリーグから活動資金の援助もあるため、選手及びサポーターの獲得に有利であるだけでなく、クラブ運営も円滑に出来る。全国には 33 のＪリーグクラブがあり、今後Ｊリーグクラブの協力を

受けることが出来れば、より多くのサッカー愛好者にブラインドサッカーを普及することが出来ると考えられる。

最後に、ブラインドサッカーは競技者の中でも障害のクラスによって魅力に感じる点が変わることがわかった。B1 クラスの競技者にとってはピッチを制限無く走り回れる点が、B2 以上のクラスの競技者にとっては見えなくても(アイマスクをしても)サッカーが出来る点が、晴眼者にとってはサッカー技術の向上になる点が最も魅力に感じる人が多かった。これを踏まえた競技者獲得の普及活動を行うことで、競技者増加に繋がる可能性が高くなるだろう。